

04・二人だけのプール

SE1 ..プールの環境音

【頭から最後まで流す】

【トラック開始から終了まで、ごく小さな音で流し続ける】

【0―5秒ほどまで流してからSE2】

SE2 ..主人公がプールサイドを歩く音

【頭から流す】

【やや小さめの音量で流す】

【0―3秒ほどまで流してからSE3】

『03・逃亡者になる』から約三週間後。

クラウディアが二年生の夏、夏休み後半。夜七時四十五分ごろ。

主人公、今日はプール点検の仕事を命じられてしまった。
本来なら体育教師の仕事なのだが、彼女は休暇中である。

なので渋々、いや、意外と楽しく作業している。

せつかなので、着替えた。他の教師に借りてジャージも着て作業している。どう見てもやる気にあふれている。

主人公は、学生時代プール授業は嫌いだったが、プールの雰囲気そのものは好き。というタイプである。

あれから主人公とクラウディアは、ますます仲良くなった。

今日もこれから会って、食堂と一緒に食事をする予定なのである。

クラウディアは、今日は学内でアルバイトである。

アルバイトが終わったあと、このプールで待ち合わせる予定だ。

現在、実は二人はすでにもう両想いである。

だが、主人公は『もしかしたら両想いかも』『いや、やっぱり違うかも。自分の思い込みかも』というのを繰り返すだけにとどめていた。

確かめる事は、少なくとも主人公からはできないからである。

自分達は教師と生徒。

少なくとも、どちらかが在学しているあいだは、交際できるはずもない。

そんな主人公の悩みは、あれからクラウディアがかわいく見えて仕方ない事である。以前から客観的にかわいいと思っていたが、今は主観的にもかわいいので止まらない。あの日初めて握った、クラウディアの白くて痩せた、骨の浮いた手が忘れられない。

『なんだか勝手に指先が冷たそうなイメージを持っていたけど、すごく温かった』

『バスが来た時、本当に名残惜しそうに手を放してて、可愛かった』

『『つないだままでいいよ』と言いたかったのに、言えなくて失敗した』

『若い女性同士で手をつないでいる光景なんて、さほど珍しくもないんだから、自分たちもそうすればよかった……』

『ていうか、私服かわいかった。イメージぴったりだった。緑のワンピースかわいかった』
『傘をさしてもらって、顔が近づいた時もドキッとした。本当に美少女だなんて思った』
などと、考えてしまう。

しかし、それだけではない。

クラウディアへの恋愛感情を自覚してから、主人公は大きく変わってしまった。

昔は気にも留めなかったものが、なんだか性的に見えるようになってしまったのである。いわば性のめざめである。もう二十代半ばなのに。

人と比べる事ではないと思うが、早い方では確実でない。はつきり言おう。遅い……。

『しかし、こういうのって、一般的には逆ではなからうか。年上で、先生の自分が、橘さんをセクシーな雰囲気で惑わす。その結果、年下で生徒の橘さんが性にめざめる。この方が年齢的に考えて自然ではないだろうか。……まあいいか。できない事を言ってもしょうがない。人それぞれです』
と、思っている。

それでも、こんな事で悩めるなら平和だ。本当の問題は別のところにある。
主人公はもう、クラウディアの事を『生徒の一人』だとは思えない。

クラウディアだけが、他の人とまるで違って見える。

クラウディアに性的な魅力を感じては、そのたびに、これまで感じた事のない強い感情に襲われている。

だから主人公は、この気持ちをどこかで発散しなくてはならなかった。

だから先日、クラウディアに似た印象の女の子が出てくる、アダルトコミックを探した。できるだけそのキャラクターが、行為する相手を喜んで受け入れている内容がよかった。そのくせ、最終的には彼女が快樂でぐちゃぐちゃにされるものがよかった。それから、それを読んで、自分は……。

思い出すのも申し訳なくなる。

『似たキャラクターという別人』なら許されると思ったが、罪悪感は消えなかった。

もし、自分がこんな事をしていざ知られたら、自分は、間違いなくクラウドディアに軽蔑されるだろう。

いや、その程度で済めば、ましなくらいだ。

クラウドディアは、自分に裏切られた気分になるのではないだろうか。

そう思うと、主人公は胸が張り裂けそうになる。

クラウドディアは、性の話題を極端に嫌っている。

男性からも、女性からも性的な目を向けられ、嫌な目に遭う事が多かったからだ。

そんな彼女が『安心できる相手』として認識している主人公にまで、実はいやらしい目で見られている事を知ったら、クラウドディアはどんな気持ちになるだろうか。

主人公は、今なら、クラウドディアが自分に心を開いた理由がわかる。

自分は恋愛にも、性にも関心が薄かった。人を好きになった事はあるが、思うようにはいかなかった。そのままこの年齢になった。

だから、恋愛に関しては学生たちと同レベル、あるいは自分の方がよっぽど下なのである。

ゆえに自分は、クラウドディアにとって、警戒しなくてもよい存在だったのだ。

でも、もう違う。自分は、クラウドディアを『そういう目』で見ている。

クラウドディアが以前言ってくれたように、自分も、クラウドディアの味方になりたかったのに。今の自分はクラウドディアを傷つける存在になってしまった。

……それでも、彼女の味方でい続ける方法はある。この気持ちを殺す事だ。

主人公が、あくまで『年上の善良な女性』『よい先生』としてクラウドディアに接すれば、自分たちはこのままでいられるだろう。

それならきつとできる。どの道叶わない恋だ。そうしよう。叶わない恋には慣れている。と主人公は思う。

一方その頃、クラウドディアはアルバイトを終え、プールに向かって、早足で歩いている。早く主人公に会いたくしょうがない。

クラウドディア、最近『もしかしたら脈があるのかもしれない』と思い始めている。そんな風に思う自分を『ないない』と否定しながらも、期待せずにはいられない。

それくらい、あの日主人公が手をつないでくれた事は、クラウドディアにとって大きかったのである。

今日もこれから会えるのだと思うと、舞い上がってしまう。

クラウドディア、ようやくプールに到着し、プールサイドに向かう。

ふとそこで、このまま行ったら、ストッキングが濡れてしまう事に気づく。なので、先に更衣室へ行つて、ストッキングだけを脱ぐ。

本当は、足を見せるなんて誰に対しても嫌なのだが、クラウドディアは、主人公の事だけは警戒していない。

主人公が自分を性的な目で見る事など、想像もしていない。

そんな主人公の人柄に安心しているが、実はそれが残念でもある。

クラウドディアは、これまで、自分を性の対象にする人間を軽蔑してきた。

だから主人公の、善良な少年のような優しさと、親切な少女のような明るさにホツとした。

主人公は容姿も中身も、極端に女性っぽくもなければ、特に男性的という印象もない。そんな主人公は、クラウドディアにとって、ある意味、性別のない存在だった。

だから、この人なら、自分と、一人の人間として接してくれるかもしれないと思い、好きになった。

なのに今は、主人公にだけは、いやらしい目で見てほしい。自分に性的魅力を感じて、ドキドキしてほしい。それから、叶うなら身体に触れてほしい。

だが、そんなの、我ながら都合がよすぎると感じる。そもそも、そんな事はあり得ないと思っている。

まったく、何が『脈があるかもしれない』だろう。そんなものはなかった。最初から。主人公が自分を恋愛対象として見てくれる日なんか来ない。それに安心しているくせに、それが耐え難いほどつらい。

それでも一緒にいたい。せめて卒業までは『いい生徒』でいさせてほしい。クラウドディア、淋しい気持ちを振り払うように、明るい声で主人公に声をかける。

SE3 ..プールの扉が開く音

【頭から最後まで流す】

【やや小さめの音量で流す】

「【明るい声で】

先生。お待たせしました。アルバイト終わりました！」

SE 4 ..プールの扉が閉まる音

【頭から最後まで流す】

【やや小さめの音量で流す】

SE 5 ..クラウドディアの足音

【頭から流す】

【だんだん近づいてくる】

【0―3秒ほどまで流してセリフ】

〈主人公〉

「た！」

主人公、先日『デイデイ』と呼んで欲しいと言われたのに、思わず『橘さん』と呼びさうになる。

クラウドディア、これを察する。

「不満そうに。ちよつとコミカルに」
た？」

〈主人公〉

「デイデイ！」

「すごく嬉しい。満足げに」
はい。そうです。私はデイデイです。ふふっ」

クラウドディア、いざ主人公の顔を見ると、さっきまでの悩みが消えていく。
主人公は今日も明るくて、優しく、ちよつと抜けている。
一緒にいると、とても安心する。この人の事が心から好きだと思う。

しかしクラウドディア、ここで大切な事を思い出す。
主人公には、先週大変な事があったのである。

「心配して気遣う」

ご自宅の件、災難でしたね。まさか水漏れするなんて。

しばらく教師寮にお住まいになるって聞きました。

お引っ越しはいつになるんですか？」

〈主人公〉

「わ。情報早いね！

そうなの。上の階から来たからなすすべもなかったよ……。もしや池脇さん情報？」

「そうです。『掃除婦（そうじふ）は何でも知ってるのよ』っておっしゃってました」

そう。主人公は数日前まで学院近くのマンションに住んでいたのだが、先日水漏れに遭い、引っ越さざるを得なくなってしまったのである。

だが、あまりにも急だった。

なので、学院側のはからいで、しばらくのあいだ、教師たちが使っている寮に住む事になったのである。

クラウドディアと主人公は、先日こっそり連絡先を交換した。

だが、主人公はこの件を伝えていなかった。

それは引っ越してバタバタしていたから……ではなくて、自分から連絡をしたら、クラウディアに気持ちが悪くバレてしまいそうで、できなかったのである。

いくらなんでもそんな事はないと思うが、とにかくできなかったのである。なので主人公、情報が早い事に驚きつつも、会話を続ける。

〈主人公〉

「引っ越しはね、とりあえず昨日済ませたよ。

だから、今日からは教師寮から通っているのだ」

「あ、もう引っ越されたんですか。

【共通点が増えて嬉しい】

ふふ。じゃあ、今日からお互い寮生ですね。

でも、それじゃあまだお忙しいでしょうに。

【かわいく怒る。あまり非難しているように聞こえないように】

お仕事押し付けられるなんて、ひどいですね」

〈主人公〉

「まったくだよ！ 水害に遭ったばかりの人間にする事ですかねこれ？
でも実は割と楽しんでるけど！」

【主人公が落ち込んでいないようなのでホツとする】

うふふ。お手伝いします。プール掃除。じゃなくて点検？ でしたよね」

〈主人公〉

「そうそう。ありがとう！ でももうほとんど終わったよ。

あとはこれを持っていくだけ」

「あ、あとはこれ運ぶだけなんですね。私にも下さい。

八時過ぎる前に終わらせちゃいましょう。夜ご飯、楽しみですね」

〈主人公〉

「うん！ 今日はそのために頑張っていたようなものだよ！」

SE 6 .. 二人がプール用具を持ち上げる音

【頭から最後まで流す】

クラウドディア、主人公の言葉が嬉しくてドキドキする。

主人公に他意はないだろうとわかっているが。どうしても期待しそうになる。

一方、主人公は、今日はクラウドディアが足を露出しているのに気づいてしまった。プールサイドを歩くのだから当然の処置なのだが、やはりドキドキしてしまう。

クラウドディアは、暑くても夏用のストッキングを履くような子である。

ソックス姿さえレア。足を出している事は、めったにないのである。

主人公、クラウドディアの白い足があまりにもきれいなので、つい目が行く。同時に、これは警戒されていない証拠だと感じ、申し訳なくも嬉しくなる。

だって、嬉しいのは当然だ。

警戒心が強くて、他人と距離を置きがちな生徒が、教師の自分にだけは心を開いてくれる。それをかわいと思うのは、自然な事だと思う。

でも『先生』ならそこでストップだ。クラウドディアの事を『かわいい生徒』以上に思っているわけではない。自分は『先生』なのだから……。

やっぱり自分たちは、今以上の関係にはなれない。クラウドディアの信頼を裏切れない。

主人公、そんな事を考えているせいで、足元が怪しくなってくる。
クラウドディア、主人公の動きが妙なので、心配で思わず声をかける。

SE7 .. 主人公の足音

〔SE5と同じ音〕

〔途中から流す〕

〔5―8秒ほどまで流してセリフと重ねる。重なってからは音量が小さくなる。その後、279のセリフまで流し続ける〕

〔心配して〕

先生？ 少し持ちすぎじゃありませんか？ そんなに一気に運ぶと……」

主人公、クラウドディアの足が気になってしょうがない。

今までどんなに美しい女性の足を見ても『わあきれいだなあ』『自分もあんな風だった
らよかったのになあ』としか思った事がなかった。

ていうか、今だって基本的にはそうだ。今日の前にクラウドディアじゃない女の人
が足を露出して現れても『わあ大胆』『寒くない？』くらいにしか、きつと思わない。

なのに今は、全然違う事を考えている。もっと見たいし、触りたい。
自分の足とクラウディアの足をぴたりくっつけて、その感触を確かめたい。

〈主人公〉

「平気平気！ 早くご飯行きたいもん。大丈夫……だいじょうぶ……あぁっ！」

そんな事を考えていたせいで、主人公、あっさりバランスを崩す。
そのまま、プールにドボンと落ちる。

「【驚いて】

あ……！」

SE8 ..主人公がプール用具を落とす音

【頭から最後まで流す】

SE9 ..主人公がプールに落ちる音

【頭から最後まで流す】

「心配して悲鳴を上げる」
先生！」

主人公、呆然とした表情で、プカッとプールから浮かび上がる。

〈主人公〉

「……やっちゃった。平気でも大丈夫でもなかった……。注意してくれてたのに！ ごめん……ごめんね……」

「とても心配して」

大丈夫ですか？　すぐに誰か呼んできます。痛いところはありませんか？」

主人公、反射的に『それは困る！』と感じる。

クラウドディアは心配してくれているが、二人きりがいい。なので、誰も呼んで欲しくない。

〈主人公〉

「大丈夫！　普通に落ちただけだから、どこも打っていないよ。平気。」

……て事は、やっぱり平気だし大丈夫だった……？

あはは。最近水難の相が出てるって感じだね。今回は完全に自分のせいだけど」

「本当ですか……？ とにかく、早く上がりましょう。風邪をひいてしまいます」

〈主人公〉

「ううん。むしろラッキーな気さえしてきた。実は今年初プールだし。気持ちいいかも」

【今気づく】

あ、そうでしたね。先生は、プール授業ありませんよね。

【主人公が楽しそうなので安心する】

ちよっと安心しました。ふふ、確かに気持ちよさそうです」

〈主人公〉

「実はさ、わたしプール授業は嫌いだったけど、プールそのものは好きなんだよね。

この、一面水色になってる感じとか、水面がキラキラ揺れてる感じとか。好きなんだ。なんだかかえって得した気分かも。

一人だったら絶望してたかもだけど、デイデイがいるし」

「わかります。

……なんだか、ちよつと先生が羨ましくなってきました。

じゃあ、秘密にしておきましょう。どんどん泳いじやって下さい。
タオル持ってきますね」

〈主人公〉

「……ねえ」

「きよんとんとして」

はい？」

主人公、クラウディアがプールに興味を示している事に気づく。

そういえば、クラウディアは以前『水着になるのが嫌だ』『身体を見られるのが嫌だ』
と言っていたのであつて『プールが嫌いだ』とは言っていない気がする。

たとえば水着以外の格好で、誰も身体をじろじろ見ない環境なら、話が違うのではない
だろうか。

主人公、こんな時『よい先生』なら、なんと言うのだろう。と思う。

少し考えたがわからない。じゃあ、自分ならどうしたいかというと、一緒にプールに入りたい。そうしたら、きっと楽しいと思う。

クラウディアが水の中に入ってしまえば、自分は彼女の顔だけ見ていればいい。そして、身体を見てしまう事もない。そうすればクラウディアにとっても安心のはずだ。

〈主人公〉

「……ディディも入っちゃう？」

「えっ？」

SE10 ..クラウディアが一步近づく音

【SE5、7と同じ音】

【途中から流す】

【10―12秒ほどまでの数歩のみ流してセリフ】

〈主人公〉

「本当は、興味あるんじゃない？」

それに、もしクラウドディアもそれを望んでいて、でも躊躇しているなら、その手を引っ張りたい。と思う。

「でも」

SE11 ..クラウドディアがさらに一歩近づく音

【SE5、7、10と同じ音】

【途中から流す】

【13―14秒ほどまでの二歩分のみ流してセリフ】

〈主人公〉

「今思ったの。もしかして、ディディって、プールそのものは嫌いじゃないのかなって。勘違いだったらごめんね。

……でも、もしそうなら。今制服だし。わたししかないし。チャンスじゃない?」

主人公、ここまで言うてからようやく気づく。

今自分は、明らかに『先生』でいるのをやめてしまっている、と。

「でも……」

SE12 ..クラウドディアがさらにもう一步近づく音

【SE5、7、10、11と同じ音】

【途中から流す】

【15―17秒ほどまでの数歩のみ流してセリフ】

〈主人公〉

「……おいでよ。一緒に泳ごう?」

「【息づかいだけで表現する】

……っ」

クラウドディア、ためらいつつも、少しずつプールに近づいて行く。

一步進むごとに、クラウドディアは色んな事を考える。

主人公が誘ってくれている。

それだけで、クラウドディアはくらくらするほど嬉しい。それに、主人公の言う通りである。

クラウドディアは、主人公と一緒になら、プールに入りたい。
一緒にずぶ濡れになって、まるで同級生みたいに水遊びをしたい。

……それに、もし自分がびしょぬれになったら、主人公はそんな自分を放っておかないだろう。

普通に食事をするより、長い時間一緒にいられる気がする。

そう。自分は計算高いのだ。こんな時さえ計算しながら動いている。
主人公の事が好きだ。一瞬も理性を失わないくらい。

SE13 ..クラウドディアがプールに向かう足音

【SE5、7、10、11、12と同じ音】

【途中から流す】

【20―22秒ほどまでの数歩のみ流してSE14】

SE14 ..クラウドディアがプールに飛び込む音

【頭から最後まで流す】

【やや小さめの音量で流す】

クラウドディアがプールに飛び込んだ途端、ばしゃん！ と、思ったよりも大きな音がする。

それを聞いて、クラウドディアの気分はますます高揚する。
不思議な万能感に襲われる。

一方、主人公、ものすごく驚いている。

クラウドディアが、思った以上に勢いよく飛び込んできたからである。
それから、思いつき水しぶきを食らって、全身ずぶぬれになったからだ。

〈主人公〉

「思ったより激しいね」

「【今までで一番明るく笑う】」

あはは。すごい！ 思ったより水がはねちゃいました。
これで、二人揃ってびしょぬれですね」

〈主人公〉

「わたしの方が確実にびしょぬれだよ！ ひどいよ！」

「ふふ！ ごめんなさい！ 加減ができなくて」

〈主人公〉

「もう！ びっくりしたよ！ 勢い良すぎ！」

主人公、そうは言いつつも楽しい。クラウドディアがものすごく楽しそうだからである。クラウドディアが、また一つ自分自身を解放してくれたようで、幸せな気持ちになる。結果的に、自分は『よい先生』になれたのではないか。と思う。

また、クラウドディアも、主人公の楽しそうな姿を見てホツとする。

主人公への感謝の気持ちが、自然と言葉になる。

「【少し間をあけてから切り出す】

先生。さっきのご質問ですけど。

おっしゃる通りです。私、本当はプール嫌いじゃないです。昔は好きだったんです。水の中にいるのって、とても気持ちいいなっています。

【少し間をあけてから】

でも、ある時から怖くなった。見られるのが怖くて、近寄れなくなった。

【少し間をあけてから】

人の目を気にして、やりたい事がいつもできない。そんな自分がずっと嫌でした。でも。

【明るく笑う】

入っちゃいました！ ふふふ。

おかしい。こんな簡単な事だったんですね。

先生はすごいです。私に、いつも色んな事を教えてくれるんです」

主人公、これを聞いてますます嬉しくなる。

クラウドディアと、まるで同級生のようににはしゃぎたくなる。

〈主人公〉

「よし。じゃあ早速さらに新しいことを教えるね。くらえっ！」

主人公、クラウドディアに向かって、思いつきり水をかける。

ちなみに学生時代はこんな事できなかった。そういうキャラクターじゃなかった。

SE15 .. 主人公がクラウディアに水をかける音

【頭から最後まで流す】

【驚く】 ※少し喘ぎっぱく、セクシーな印象にする

あっ！

〈主人公〉

「あはは。びしょびしょ。これでわたしと変わらなくなったね」

【かわいく怒る】

もう、先生、ひどい」

〈主人公〉

「そうです。ひどいのです！」

SE16 .. 主人公がクラウディアにさらに水をかける音

【頭から流す】

【0―4秒ほどの、2回分の『パシャ、パシャ』のみ流す】

「【驚いて声が漏れる】 ※少し喘ぎっぽく、セクシーな印象にする

あっ

【かわいく怒る】

もう！ 怒りましたよ！」

SE17 ..クラウドディアが主人公に水をかける音

【頭から最後まで流す】

〈主人公〉

「キヤー！」

クラウドディア、本当に加減ができていない。

主人公がかけた水量とは比較にならないほどの水をかける。

よって、主人公、頭からつま先まで全部ずぶ濡れ。

正直呆然とするが、クラウドディアだから許してしまう。

一方、クラウドディア、ちよっとやりすぎてしまったと自覚しつつも、濡れてポカーンと

している主人公がかわいくて仕方がない。

対するクラウドディアは、身体はともかく、髪の毛はあまり濡れていない。
主人公は、やはりちゃんと加減してくれているのだった。

〈主人公〉

「あんまりだよ！ わたし、どれだけ水難なの」

「【こらえきれずに笑ってしまう】

ふっ、ふふっ……ふふふふっ！」

〈主人公〉

「ふふ。ふふふふ！」

主人公、クラウドディアが笑ったので、濡れた事はもうどうでもよくなる。

また、これによって主人公は、自分が一番したい事に気づく。

それは、クラウドディアに自由になっもらう事である。

自由というのは、まず、クラウドディアがのびのびと、自分自身を、好きに表現できる事だ。
次に、何かに警戒する必要もなく、誰かの存在におびえることなく、安心して眠れる暮

らしができる事だ。

そして最後に、いつも明るく笑ってられる事だ。

主人公『であれば、自分がその場所を作る人になりたい』と思う。

もしそれが叶うなら、自分は一生、クラウドディアの恋愛対象になれなくても構わない。少なくとも、クラウドディアが主人公に飽きるまで、クラウドディアが自由でいられる場所を維持したい。

『よい先生』として、彼女の在学中だけでもいいからそばにいたい……と思う。

【緊張しながら、少し真面目な声で】

あの、先生」

〈主人公〉

「うん？」

主人公、クラウドディアに呼ばれた事で、自然と身体を近づけ、見つめあう。

それから『まるでこれから、キスしちやいそうな雰囲気。……恋人だったらね』と思い、すぐにその考えを打ち消す。

しばしの沈黙。

やがて、沈黙を破るようにクラウドディアが話し始める。

「私……」

だが、話し始めた途端、突如空に花火が上がる。

今日は花火大会の日であった。

SE18 .. 花火が打ちあがる音

【頭から流す】

【0―8秒ほどの最初の大きな『ドン!』のあとセリフ】

【その後は、セリフの邪魔にならないように若干音量を下げる】

〈主人公〉

「あ……!」

クラウドディア『そういえば』と思い出す。

自分とした事が、こんな大イベントの日程を忘れているだなんて!

いや、そんな事を言っている場合じゃない。主人公と花火が見れた！

一方、主人公は今日が花火大会だという事をまったく知らなかった。

主人公はこの地域の出身だが、昔に比べて花火大会の数は減り、日程も変わってしまった。

全国的にそうらしい。警備の予算がないようだ。

なので『えっ、今日なんだ！』と思っている。

花火大会の会場はやや遠いようだ。

だが、誰もいないプールは、絶好の鑑賞スポットである。

水面には花火が映り込み、幻想的な光景になる。

【大興奮。話そうとしていた事を忘れてしまう】

あっ……！！ 先生！ 見て！ 花火です！」

〈主人公〉

「すごい！ すごいね！ 花火だ！」

「感激している」

すごい……！　ここから、こんなに綺麗に見られるんですね。
あの、ご存知でした？」

〈主人公〉

「ううん。知らなかった！　花火大会が今日って事も知らなかったの！」

「しれっと嘘をつく」

「そうですよね。私も知りませんでした！」

クラウディア、実はさっきまで、告白するつもりはないが、近い事を尋ねたくなってしまうていた。

『私、気になっている事があって。先生はどうして、私にこんなに親切にしてくれるんですか？』と聞こうとしていたのである。

だけどそんな事、急にどうでもよくなってしまうた。

そんな事を聞きたくなかった理由は、この前と同じだ。

主人公の口から『デイデイが気になるから』とか『心配だから』などといった、優しい言葉を引き出したかったただけだ。

対する主人公、花火に感激している。あまりにも素晴らしい思い出ができてしまった。興奮気味にクラウドディアに話しかける。

〈主人公〉

「……ねえ、今、すごい青春っぽいね。」

わたし、学生時代は地味で、若者らしい夏の思い出があんまりないんだけど。今日すごくすてきな思い出が作れた気がするよ。ありがとう。

すごいね！ 夜のプールに服のまま入って、花火まで見ちゃった。なんだか映画みたいだね！」

主人公、クラウドディアと二人で花火を見られた事が嬉しくて、悩んでいた事をすっかり忘れている。

主人公があまりにも嬉しそうで、きらきらとはしゃいでいるので、クラウドディアはときめく。

クラウドディアは主人公が楽しそうなのが嬉しい。

年上の主人公が時々見せる、年下みたいにかわいい笑顔がたまらない。まるで、自分の方が守る側になったような気分になってしまう。

「はい。わかります。すごく『青春』って感じがします」

〈主人公〉

「でも、みんなには言えないね。だって、ここ、良すぎるよ！

ここから、こんなにはつきり花火が見えるなんて思わなかった。

みんなに知られたら、来年からここ、鑑賞スポットにされちゃう。

……だから、秘密だね。誰かに教えちゃだめだよ？」

主人公、きやつきやと笑うが、それでも『二人だけの秘密にしようね』とは言えない。かろうじて、おおむね同じ意味の言葉を言うのが精いっぱい。

それでもクラウドは嬉しい。主人公と秘密を共有して、胸がいっぱいになる。

「【落ち着いているようにふるまうが、すごく嬉しい】

はい。秘密です。こんな素敵な事……誰かに言うはずありません」

主人公、ここでようやく少し冷静になる。話が途中だった事を思い出す。

〈主人公〉

「……そうだ。ところで、さっき何を言おうとしていたの？」

花火ではしゃいじゃって、忘れかけててごめんね。なあに？ 聞くよ」

クラウドディア、先ほど言いかけた事について問われるが、今聞くのはやめよう、と思う。

『主人公は。どうしてこんなに自分に親切にしてくれるのか』。

そんな事をわざわざ尋ねて、優しい言葉をもらおうとしなくても、今自分はとても幸せで、満たされている。

「【大した事ではなさそうにふるまう】

ああ。いいんです。

何話そうとしてたか、忘れてしまうくらいの事だったので。

【少し間をあけてから。すごく幸せそうに】

……先生。私今日の事、ずっと忘れません。

先生に会ってからずっと、夢の中にいるみたいです」

クラウドディア、主人公に微笑みかける。

それがあまりにも美しいので、主人公は言葉を失う。

もう少し明るい場所でこの顔を見られていたら、自分の気持ちは完全にばれてしまうだろうと考える。

そう思っていると、クラウドディアがもっと嬉しそうにするので、言葉が出てこない。ドキドキして、声が出ない。

「本当に……ありがとうございます」

花火の音だけが遠くで聞こえる。

でも、主人公の目には入らない。クラウドディアの事だけが気になっている。

このままフェードアウトして終了。